

親鸞万華鏡



東本願寺出版

はじめに

本書は、東本願寺出版が発行する月刊誌『同朋』どうぼうに、2017年7月号から2023年6月号まで連載したインタビュー企画「親鸞万華鏡」のうち、30篇を1冊にまとめたものです。

浄土真宗の宗祖・親鸞（1173～1262）は、生誕から850年に及ぶ長い歴史をとおして人々に敬愛され、その教えや生涯の伝承などが語り継がれてきました。とりわけ近代以降には、数多くの知識人や文化人が、信仰の如何にかかわらず親鸞について語り、その思想や人物像を論じるようになります。その中には、親鸞との出会いによって自らの実存を揺るがされるような衝撃を受け、根本的な思想の転換を経験した人も少なからずいました。そして現在でも、親鸞とその著作は国内外のさまざまな人々に親しまれ、生きる支えや思想的なバックボーンを提供し続けています。

100人の人が親鸞を語れば、100通りの親鸞の姿が見えてくる。そんな多彩な

親鸞像を概観するために、「親鸞万華鏡」では、親鸞に関心を寄せる各界の方々にインタビューし、それぞれの親鸞観を語っていただきました。

まるで万華鏡のように、見る人の目で刻々と彩りを変え、新しい模様を次々に花開かせる…。本書から、そんな融通無碍な親鸞の魅力を感じ取っていただければ幸いです。

2023年11月1日 東本願寺出版

目次

はじめに

3

心挫^{こころづ}けた時に会った言葉

武田鉄矢

9

家族論の視点から

芹沢俊介

21

「死者論」の視点から

若松英輔

33

「自然法^{じねんほう}爾」の言葉に導かれ

桜井洋子

45

常にゆらぎ続ける「となりの親鸞」

中島岳志

57

「書」から見た親鸞

石川九楊

71

思想史の立場から

末本文美士

83

世界の現実のただ中で

四方田犬彦

95

激変するこれからの社会を見つめて	寺島実郎	107
スローな世界を求めて	辻信一	119
声に出して読みたい親鸞の言葉	齋藤孝	131
僧侶として、ミュージシャンとして	二階堂和美	143
「編集」の視点から見た法然・親鸞	松岡正剛	155
「超越と実存」から道元と親鸞を読み解く	南直哉	167
社会学の視点から親鸞の可能性を読む	大澤真幸	179
「貧しく小さくされた人々」と共に	本田哲郎	191
近代仏教研究の視点から	碧海寿広	203
『教行信証』が私たちに投げかけるもの	阿満利磨	215
現代の思想として親鸞を読み解く	守中高明	227
日本中世の歴史における親鸞	平雅行	239

歴史小説家の視点から

和田竜

251

親鸞の晩年に「身軽」の哲学を見る

山折哲雄

263

今の時代に親鸞がいたなら

森達也

275

仏教の進化における親鸞

平岡聡

287

『歎異抄』に見る教えのスタイル

三田誠広

299

西洋の思想と親鸞

西谷修

311

親鸞の声に惹かれて

伊藤比呂美

323

メタバースと仏教はどう重なるか

井上智洋

335

現代作家が親鸞を読む

高橋源一郎

347

逆境の時代に親鸞から学ぶ

姜尚中

359

インタビューの紹介

370



武田鉄矢

歌手・俳優

撮影：山川哲矢

心^{こころ}挫^{くじ}けた時に出会った言葉

武田鉄矢 たけだ てつや

1949年福岡県生まれ。歌手・俳優・タレント・作詞家。福岡教育大学卒業（2008年に名誉学士号を授与）。72年にフォーク・グループ海援隊でデビュー。73年に「母に捧げるバラード」がヒット。79年には映画『幸福の黄色いハンカチ』で日本アカデミー賞最優秀助演男優賞を受賞。俳優としても脚光を浴びる。また同年にはTBSドラマ『3年B組金八先生』がヒット。主題歌「贈る言葉」も大ヒットし、同作は2011年までシリーズ化が続いた。

インタビュー：川村妙慶

母の法事をきっかけに

『歎異抄』の言葉と出会う

——武田さんは、『歎異抄』^{たんにしやう}に記された親鸞の言葉をととても大切にされているとお聞きしたのですが。

そうですね。うちはずっと浄土真宗の門徒でしたし、親鸞という人は何か不思議なことを言う人だな、ということは昔から思っていました。それで、今から20年ほど前に『歎異抄』を読み始めたのですが、ちょうどその頃に母が亡くなったことがきっかけなんです。

——海援隊のヒット曲「母に捧げるバラード」で歌われた、あのお母さまですね。

ええ。その母が亡くなって、四十九日^{しじゅうくにち}の法要が勤まったのですが、その日私は仕事で忙しくて、九州の実家に帰れなかったんです。すると兄が怒って、「お前、母ちゃんの四十九日に帰って来れんとか！」と電話でなじられて……。それで私もちよつとムツとして、うつぶん晴らしてドライブに出かけたんです。すると、たまたま車のラジオから『歎異抄』の朗読が聞こえてきて、「親鸞は父母^{ふも}の孝養^{きやうよう}のためとて、一

返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」という有名な言葉が耳に飛び込んできたんですよ。その言葉の意味がよくわかったわけではありませんが、その一言でとてもほっとして、何か母の法事に帰れなかった自分が許されたような気がしたんです。

——その「親鸞は父母の孝養のためとて……」という『歎異抄』の言葉は、そのあと「そのゆえは、一切の有情^{うじよう}は、みなもって世々生々^{せせじょうじょう}の父母兄弟^{ぶふ}なり」と続きます。つまり、武田さんを直接産み育てたのももちろんお母さまとお父さまでしょうが、その他にも芸能界の先輩やお仕事のスタッフなど、いろんな方々が「武田鉄矢」を育ててくださったわけでしょう。だから、一切の生きとし生けるものは自分の父母兄弟である。そんなふうに、親鸞は「父母兄弟」をもっと広い視野で見ていると思うんです。なるほど。とにかくあの一言はともありがたかったですね。その出来事が、『歎異抄』を読み始めるきっかけになりました。